


新編7012・ジウ・タ・の伝説 根民真治 913.6.Ka.22

映画にもなった『黄泉が子』など知られるSF作家根民真治2人の連作短編集です。7012・ジウ・タと呼ばれる9メートルの巨大なロボットを軸として、様々な世界や想いの人を主人公とした3本の短編が収録されています。また、この作品を原作とした舞台があり、DVDにもなっている。読んだ人はとても楽しんでみて下さい。 R.K.



『舟を編む』 光文社 三浦しほん 913.6 M167

この本は映画化されたので多くの皆さんは知っている。玄武書房に勤かひる馬場裕光さんが中心となり辞書を編集。全身全霊をこめて辞書執筆。その姿に羨しを覚えた。テンポ良く書き進めるといふ言葉がやみ。この本を讀んで、F.T.とあのことがある事を感じた。 A.O.




読書案内 1~3年生向

夏号


発行: 2013.7.4 メディアセンター

MCでは所蔵していませんが、N.M.先生の和紙を買出します。



八重山の戦争 大田静男著


もしあなたがこの夏休み沖繩へ行くなら石垣島や八重山諸島に旅行する計画があるならこの本を讀んで行って欲しい。はっきり言って内容は難しいが、日本という国がどんな国であるか、見なくてはならないものが何があるかを感じることが出来る。 N.M.



夏目漱石『吾輩は猫である』(新潮文庫)

[請求記号 913.6-N](Y.T.)

同じ作品でも、それを讀む時によって心に響く言葉が変わります。それが読書の面白さの一つでしょう。大人になって讀み直して、一番強く惹かれたのが漱石です。手元にあるものは全て讀み直し、未讀の作品は新たに購入しました。皆さんも、まずは一讀を。




『H』は真夜中の庭で フリッパ・ヒョアス作

933 P31


K.N.

ある休日に、友だちもいない親戚の家で、765という数字が、古い時計が13の時を打つのを聴いたなら——。これだけでふしぎの予感に涙ぐんでしまいます。時間を行き来する冒険です。私のお気に入りの本、誰か読んでくださいませんか?




『青空のルーレット』 辻内香貴 913.6/T

夏に読むならやっぱり爽やかなものを!というときにこの本をおススメします。大きな夢を追う主人公とその周りの登場人物の日常はとても楽しくて読んでいてワクワクします。お事件をき、おかけに物語はモヤモヤとした方向に進んでいきますが、その分最後のスッキリとした感覚は非常に心地良いものがあります。夏は海にアイスに『青空のルーレット』。皆さんも読書で“涼”みませんか? T.K.



『どんとこい、貧困!』 湯浅誠著 1-オース 368.2/Y

『貧困』とは何か? 国の話だと思ってる人は多いのでは? でも著者は、日本の社会にも貧困があり、大人達がやらなくて目をそらして、こころの自戒をこめて、『どんとこい』と書いています。誰もが突然に、貧困に陥る可能性がある現代は、誰かの手助けが必要で、時代でもあり、中学生には関係ないと思われ、貧困の正体を見つめてみませんか? 作家・湯浅誠の対談ものについて。 M.K.



『指輪物語』 第一部~第三部 J.R.R.トールキン著

933-T-1 ~ 933-T-9

有名な作品でも手にしていない人が多いのは、ファンタジーの世界の本の元の上の本です。映画も三部作の大作で、この前の時代の話『ホビットの冒険』も現在進行中。しかし指輪物語は長編のため映画ではカットされている部分もあり、本をしっかりと讀んで、映画も見てほしいです。この夏休みに読破してみたいか? E.S.



『レイチエール』 タフネ・デュ・モーリア H.K.
933/D

高校生の頃、古い洋画をよく見ていました。
そして、印象的な作品があると、原作を探して読むのが楽しみでした。デュ・モーリアは、そのようにして出会った作家の一人です。普段ミステリー小説はあまり読まないのですが、この作品は心理描写が巧みで、ひきこまれるようにして読んだのを覚えています。読者が苦手な人も気軽に読める作品です。



『魚港の肉子ちゃん』 西加奈子 913.6 N81

肉子ちゃん(キクリン)のお母さん。勿論お母さん、肉子ちゃんはいつも元気。しかも豪華!! 肉子ちゃんの人生は波乱万丈、男運も悪い。でも常に前向き。素敵はモノマサに憧れる年頃のキクリンにとり、少しうとみしい時もある。魚港に暮らす人々と肉子ちゃん、キクリンのお話。沢山笑って、最後はくっ!! ときます。心に栄養をどうぞ。
Y.K.



『眠りぬけぬ夜のために』 カール・ヒルティ著 (139.H58)

スイスの哲学者ヒルティが1919年に書いた本書は、365日、日付のついた短文が綴られている。聖書を引用しながら、著者の人生経験や深い思索に基づき、いかに生きるべきかと言っている。読むたびに軽められ、ゆるめられ、時には自省を促され、新たな気づきを与えられる。座右の銘の如く、座右の書。これもまた読むと余計に眠れなくなるかも。岩波文庫にもあり。 R.F.



『できそこないの男たち』 467.3/F 福岡伸一

まず飛び込んでくるのは、なんともギョッとさせる書名です。生物として「男」と「女」を考察し、「生命の基本は女である」というところから話しが始まります。分子生物学で分かってきた「男」を生み出す遺伝子とその発見をめぐる研究者のレース。生物に興味がある人にも推理小説が好きな人にもオススメです。
S.S.



『つぎはき』 呉智英 著 180/K

親にとって子供とは「自我の延長」なのだ気がしたことがある。泣き叫ぶ声に平常心を失うのも、オムリを替えて手が汚れるのも平気なのも、長じて我が子には有名大学に入ってもらいたいと思うのも、それは子供という「他者」に愛を向けているからではなく、それは自我の一部と感じているからである。世に「愛」にあふれるようにうさぐさを感じ、また自我とは何ぞみろかを考えた人に本書はオススメだ。私にとりては近頃、とても面白く読んだ本の一冊。夏休み、メモとりつつ教科書のように読んでほしい。高校生なら読める。
O.M.



『女きらい』 上野千鶴子 367.2/F

『ミソジニー』…『女性嫌悪』『女性蔑視』性別二元制のジェンダー秩序に深くうめこまれてしまった。気づかない間に意識下に沈み当り前だと疑問にも思わない怖さ。ジェンダー関連の知識に加え、是非問題意識をもちて読んでほしいです。
Y.I.



読書案内 4~6年生向



夏号

発行: 2013.7.4 メディアセンター



『検家の人論』 北社夫 913.6/K1~3

作者の父は、「おちのこの母の命を甘ん…」と有名な教員、斎藤茂吉。その義理の父が建てた青山脳病院の明治~昭和にかけての歴史を、7年にわたる作者の自伝体である半実話の小説です。院長、検基一郎をはじめ、教員のエピソードが登場人物が絡り、青山病院の栄枯盛衰は、時に可哀。時にほろろい気持ちを抱かせます。この曲者もまた愛おしく思えるところが、魅力的! 物語の後半には、私に似ている、あるいは、梅ヶ丘、専任手帳に載るといいます。ぜひ読んでみてください。
A.I.



今年、手塚治虫 生誕 85周年。

『アドルフに告ぐ』 726/I ~ 726/I/4
全4巻

ぐいぐい読めろ。「ゾルゲ事件」「ナチス」を知りたかった。「陽だまりの樹」「火の鳥」もオススメです。
Y.H.